

# 沫雪あわゆきの 庭に降りしき 寒き夜を

## 手枕たまくらまかず ひとりかも寝む

(大伴家持 卷八・一六六三)

1月20日は「大寒」です。この日から「立春」までの15日間のことを「大寒」といい、1年を24等分する二十四節気の24番目にあたります。一年でもっとも寒い時期という意味ですが、最近では直前の「小寒」の方が寒い場合もあります。本来は古代の中国大陸の気候に基づく暦ですの

で、現代の日本列島の気候とは異なる点があります。

万葉歌において「寒」を詠んだ例を探すと、意外にも秋の歌が大半です。「秋風」や「雁」などとともに表現されており、凍てつくような冬の「寒」というよりは、暑い時期と比較しての冷感だったのかもしれません。

やまと  
万葉がたり

この歌では冬の「寒き夜」が詠まれていますが、独り寝のわびしさは肉体だけでなく精神的な寒さをも表現しており、しかもそれは「沫雪」が降り続くような寒々とした夜でした。「沫雪」は、「白雪」とは区別される語で、平安時代には混同されてしましますが、「沫雪」に消えやすくはか

ない春の「淡雪」のイメージはありませんでした。そもそも漢字としての「沫(アワ)」はほとぼしる水しぶきを意味し、水中・水上の気泡を指す「泡(アハ)」とは異なります。「沫雪」を詠み込んだ

万葉歌の表現を検討すると、柔らかく水分を多く含んだものであった可能性が高く、みぞれや氷雨を指していたのかもしれない。作者の大伴家持は奈良時代に活動した歌人(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか)で、「万葉集」約45

【訳】沫雪が庭に降りついで寒々とした夜、妻の手枕をすることもなく一人で寝るのだろうか。

00首の中の一割を超える約480首が彼の作品であることから、編纂者の一人と目されています。この歌は四季分類された巻八の巻末、冬の歌の最後に位置付けられています。「古今集」以降に和歌を四季に分類することは一般的になります。が、そのはじまりは「万葉集」でした。

次回2月3日